岡崎ホスピスケアを考える会通信

http://www.okazakihospice.sakura.ne.jp/

2022年7月31日
81号
事務局：柴田 0564-55-0838

柴田由紀子

「手を洗ってね～」「はーい」
「消毒もしてね」「はーい」

孫が遊びに来た時の
〝保育園ごっこ〟の会話。
先生役のお姉ちゃんは
「換気もしましょうね」
と窓を開けます。
これが物心ついた時からコロナ禍で
過ごす5歳と2歳の孫の日常会話。
マスクのない生活をほとんど覚えて
いないから、大人が思うほど不便では
ないようだ。
コロナだからね！と保育園に行く時
はマスクに自分で名前を書き鼻の中
心をぎゅっと押さえて隙間を作らな
いようにしている。
大人顔負けです。
これが彼女たちの日常生活。

暑くなり保育園では体温調節が出来
なくなる子も多いとか：マスク生活
は辛いはず。
一日も早く彼女たちの知らない本当
の日常が戻ることを願うばかりです。

“手縫い”の報告

岡崎市民病院・国際病院・施設などへ依頼された品を作り届ける。
第２月曜日 10：00～12：00　場所　カトリック岡崎教会

手縫い雑巾作りから、清拭布（おしり拭き布）作りでの作業は、和気あいあいのおしゃべりしながらの楽しい作業から、マスクをし、全くおしゃべりしない作業と形は変わりましたが、人は変化し新しい人も加わってくださり、8～9人の出席者で毎月第２金曜日の集まりを24年間続けています。1回に1000枚くらいの清拭布ができ、先日老人施設へ1200枚が届けられました。
清拭布作りは、木綿の布をハガキ大かその倍の大きさにカットするだけの単純な作業ですが、寄付して頂いた布を無駄なくカットしようと思うと結構集中します。使われなくなった物を役立つ物とするという事も気持ちよく、それがちゃんと使っていただける方々に届いて毎日使っていただけるという事も有難いことです。
肌着・シャツ・パジャマ・シーツ・ゆかた等のご寄付をありがとうございました。
これからもよろしくお願いします。

勝川俊子

緩和ケア病棟ボランティアの報告

６月のある日、緩和ケア病棟の橋本先生から連絡を頂きました。
まだご家族も面会出来ない状況ですが、患者さんと直接お会いしない音楽のボランティアから始めてもらえませんかとの依頼。
愛知病院から市民病院内に移転して初めて訪れた緩和ケア病棟のラウンジは以前と変わらない優しい空間。
ここから病室に届けられるピアノの音色。想像しただけで心が温かくなりました。

コロナの感染がひどくなりボランティア活動を中止して２年以上の月日が流れ、ピアノ演奏と季節の飾り付けは季節感のない病棟に少しだけ日常を届けられると仲間の心も動き出しました。
七夕の日から始めようとピアノの方にお願いをして１週間前にラウンジにささの葉を飾りました。
ところが七夕を迎える前にまた感染者が増え出し、すべて中止のお知らせが届きました。
ティーサービスやアロママッサージはきっと最後の最後に始まることは覚悟してましたが、ピアノの演奏も叶わないことでまた病院の緊張感も伝わって来ました。また再開される日まで私たちはいつでもお役に立てるように季節の飾り付けなどを準備したいと思います。

柴田由紀子

早春の候、皆様におかれましては、お元気でお過ごしのことと存じます。

本日、突然ご連絡させて頂きましたのは一身上の都合にて、令和４年３月末に岡崎市民病院を退職することになりました。ボランティア担当として在職中は、ご助言やご支援をいただき誠にありがとうございました。

愛知病院在職中より、皆様のボランティア活動の姿勢に、学ばせていただくことばかりでした。皆様がお越しいただくことで、患者さんはもちろん私や職員も気持ちが癒され、言葉では言い表わせないほど感謝しております。

コロナの感染対策で、活動再開は今のところ難しいですが、今後のご連絡等は岡崎市民病院緩和ケア病棟の安田看護長よりさせて頂きます。

時節柄くれぐれもご自愛ください。

令和４年３月末日

緩和ケア病棟ボランティア担当

青山良枝

愛知病院緩和ケア病棟で、病院のスタッフとボランティアの橋渡しをして下さったコーディネーターの青山良枝さまから左記のはがきを頂きました。
市民病院に橋本先生と共に移られてからも、今の状況をお知らせいただいたり、通信をお渡ししたりと変わらずお付き合いを続けていました。
この度お母さまの介護もあり市民病院を退職されました。
前総婦長としてのご経験からか、患者さまとご家族の事を一番大切にされ理解し、ボランティアのあり方をご指導いただいたことはいつまでも私たちの心に残ることでしょう。
ほんとうにありがとうございました。

柴田由紀子

【ずっと変わらず】

「七夕の日、ピアノを弾いてもらえませんか？」
そんなお知らせが届いた。
やっと再開。いつも笑顔で迎えてくださる事務さん、
患者さまに優しく寄り添う先生や看護師のみなさん、側でずっと
支えていらっしゃるご家族さま。
そして、私の拙い演奏に、静かに耳を傾けてくださる患者さまの顔
が思い出され、素直に嬉しかった。
　私は、癒しの音楽をよく聴きます。
朝、出勤の車の中、一日の仕事を終えた帰りの車の中。
時には心が折れそうなとき、明日良いことがあるとき。
ランダムに流れる癒しの音楽を聴きながら、心がホッと暖かく
なるそんな瞬間。「この曲、いいかも」
私の心を癒してくれた曲が、金曜日の１曲になる。
　数年前から大流行を続ける「新型コロナウィルス感染」は、
私たちの生活を大きく変えてしまいました。
そんな中、毎月届くみなさんの思いは、少しも変わらずこの会が
守り続けられています。
この会での時間は、私にとっても、とても大切なものだったんだ
と改めて感じました。
一度は再開が計画された活動も、再び感染拡大が懸念され、延期
のお知らせをいただきました。
　“「大変」は、大きく変わる。大変を乗り越えて大きく変わる
　チャンスです。“そんな言葉を聞いたことがあります。
でも、私はずっと変わらないで待ち続けようと思う。
高度な技術を必要とする難しい曲の演奏はできませんが、
心を込めて優しい音色を届けられるように。
みなさんに笑顔でお会いできるその日まで。　　大野千里

寛子　83 歳

“つどい” の 報告

患者・家族・遺族（誰もが遺族）の集まり
第４木曜日 10：00～12：00　社会福祉センター（第２活動Ｂ室）

　今年は早い梅雨明けとなりました。
庭のあじさいは雨の中で咲くよりも明るい陽射しの下で咲く日々でした。
私達の日々は少しづつ“いつもの日常“が戻りつつありますが、まだまだ
油断できないのが現実です。そして厳しい暑さも続きます。
どうぞ心も身体も無理がないようにお過ごしください。
「つどい」は大切な分かち合いの場所として感染対策をとりながら続けています。ご参加お持ち
しています。水分補給のため飲み物を持参されることをおすすめします。
※緊急事態宣言の発令, まん延防止等重点措置の適用の場合は、お休みさせて頂きます。
神尾弘美

2022 年 5 月 16 日　不整脈がひどくなりカテーテルアブレーションの手術を受ける

朝 9 時半、車いすに乗り 3 階の手術室に着いた。扉が開いて目に飛び込んできたのは、無機質な機械だらけの広い部屋。まるで異次元の世界に着陸したようだった。待ち構えた人たちが手術台へと誘導し、ふらつく体に気をつけながら階段を上り横たわるとすぐに、バリ、ペタ、バシッと体中にシールを貼っていく。「何と手荒な」と思いつつ身を任せる。左上には大きなモニターがあり、先日撮ったと思われる心臓がクルクルと回っていた。これを見ながら手術をやるのだろう。誰かが「看護師の〇〇です」と名乗ってくれた。右側からは麻酔のマスクがやってきて数秒で寝落ち（？）した。　靄の中でかすかに声が聞こえる。「分かったら頷いて」と言っている。目が覚めた。時計が目に入り 12 時半を差していた。本当に 3 時間で終わったのだ。貼ったシールを剥がしながら「今日は何日？」「16 日」。そこへ「ありがとうございました」と女性の声がした。まるでそこだけピンクの花が咲いたようにポット明るくなった。「ああ、私地球に戻れた」「せ～の」の掛け声と共に（一瞬放り投げられるかと思った）ベッドに移り HCU に移動した。

3 時半になってやっと遅いお昼がもらえた。小さな焼きおにぎり 2 つとヨーグルト。右足が動かせず寝たままなのでレンチンしてラップで包んでくれた。小さく、ひと口、押し頂く。「ああ感動！」かじった所を握り直してまたひと口。お腹に染みていく。やがて腸がグルグル言いながら食べ物にありついている。グルグル言いながら蠕動運動をしている。まるでひな鳥が親から餌をもらっているようだ。お腹が鳴らなくなったら今度は足の裏からジワーッと温かくなってきた。ロウソクの灯が体中に行き渡り私の体を包み込んでいく。「私、生き返った」　食べることで命を繋ぐ、改めて実感した。

今回の入院で一冊の本『知の旅は終わらない』（立花隆著）を持ち込んだ。立花隆氏が「知の巨人」と言われる理由がよくわかった。自身が患った膀胱癌まで専門の医学書を読み実験台にしている。読み終え、入院中の持て余すほどの自由時間を思考時間に充てることができた。あまりにも膨大な内容に咀嚼できない。読みながら付箋を貼り、貼った箇所を再度読みながらメモしていった。飢えた時にもらった焼きおにぎりのように、自分の中に何かがしみ込んでいく。

何か違う自分を感じた。「最期はきれいに死にたい。やり残したことをやり終えて終わりたい。」と思っていたことが全部ガタガタっと崩れていった。「死ぬ時なんてやり残したことがいっぱいあるのが当たり前。悔いが無いなんてあり得ない。」今が大事。今やりたいことをとことんやればいい。それが志半ばで終わっても、格好悪くてもいい。自分が図太くなった気がする。

そして新しい知の旅が始まった。　　難波　清子

あとがき

ボランティアコーディネーターの青山さんの手は、長年消毒液を使い続けグローブのように硬くどっしりとしていました。この手でどれだけの人を優しく励まし助けてこられたか・・。会員のみなさまも、老い・足腰痛・病気・心痛など、生きてきた証を掲げて今日も過ごされていると思います。それを何とか受け入れ、今できることを喜んで精一杯することが使命だと信じています。微笑む、感謝する、喜びを伝える、平和を祈る、無理なく行動する・・・。そうありたい。　　橋詰清子